

2015

2020

2025

2030

野村総合研究所 創立50周年記念

2030年の日本をデザインする

名古屋

2015年10月14日 ㊤
名古屋国際会議場

● 第一部 講演

「2030年の日本をデザインする」

谷川 史郎 野村総合研究所 理事長

● 第二部 パネルディスカッション

「ワクワクする“目的”から考える」

[モデレーター]

竹内 薫 サイエンス作家

[パネリスト]

加藤 百合子 エムスクエア・ラボ 代表取締役

日比野 克彦 アーティスト

福岡 伸一 生物学者

谷川 史郎 野村総合研究所 理事長

大 阪

2015年10月19日 ㊤
ナレッジキャピタル
コングレコンベンションセンター

● 第一部 講演

「2030年の日本をデザインする」

谷川 史郎 野村総合研究所 理事長

● 第二部 パネルディスカッション

「ワクワクする“目的”から考える」

[モデレーター]

福島 敦子 ジャーナリスト

[パネリスト]

迫 慶一郎 建築家

大畑 大介 元ラグビー日本代表

山崎 亮 コミュニティデザイナー

谷川 史郎 野村総合研究所 理事長

東 京

2015年10月26日 ㊤
東京国際フォーラム

● 第一部 講演

「2030年の日本をデザインする」

谷川 史郎 野村総合研究所 理事長

● 第二部 パネルディスカッション

「ワクワクする“目的”から考える」

[モデレーター]

竹内 薫 サイエンス作家

[パネリスト]

奥山 清行 工業デザイナー

佐渡島 庸平 編集者

山崎 直子 宇宙飛行士

谷川 史郎 野村総合研究所 理事長

未来を見据え、 新たな日本を創発する

代表取締役会長兼社長

しまもと ただし

嶋本 正

2015年4月、皆様の温かいご支援に支えられて、NRIは創立50周年を迎えることができました。創立50周年を記念した今回の「NRI 未来創発フォーラム2015」は、長期的視点に立ち、未来を見据えて創造することの重要性を踏まえ、「2030年の日本をデザインする」をテーマといたしました。NRIによる講演や各分野で意欲的な挑戦を続けていらっしゃるゲストの方々の言葉から、日本社会の未来イメージを掴んでいただけるものと考えています。



講演

名古屋 大阪 東京

「2030年の日本をデザインする」

野村総合研究所 理事長

たにかわ しろう

谷川 史郎

長期的視点に 立った展望と 洞察

米国・デューク大学のダビットソン教授が2011年に、「いまの小学生の65%は、将来、まだ存在していない職業に就く」と発表しました。小学生たちが社会に出る頃、日本はどのような国になっているのか。あるいは、私たちはどのような社会環境を彼らに用意していけるのか。長期的視点に立った展望と洞察が強く求められています。

2030年までこれから15年あります。政治や経済、人びとの暮らしがめまぐるしく変化する現代社会において、それは決して短い期間ではありません。15年前を振り返ってみても、現在、世界で株式時価総額1位のアップルは、パソコンしか作っておらず、同2位のグーグルは、まだ創業2年目でした。

2030年に向けて 私たちが なすべきこと

では2030年に向けて、私たちは何をすべきでしょうか。ポイントはふたつあります。第1は潤沢な技術開発資源を活用して、「グローバルに存在感のある日本」を創造することです。そのためには、「日本らしい強みを持った次世代産業を創っていく」ことが重要です。2012年に、米国・ゼネラルエレクトリック（GE）社は日本カーボンと航空機エンジンに使用される炭化ケイ素繊維の製造・販売をおこなう合弁会社を設立しました。炭化ケイ素繊維は長い間、実用化の目処がつかず、短期利益を追求する米国企業は研究開発から撤退しましたが、日本カーボンは将来の用途拡大を期待して、技術を社内に蓄積していました。日本の研究開発費は世界第3位であり、こうした埋もれた技術が多くあるため、「宝の山」ともいわれています。今後15年、日本は特に「感性応用技術分野」、「健康寿命増進技術分野」、「造水／水循環技術分野」、「新素材技術分野」で存在感を高めていけると考えています。

第2のポイントは、地方経済の活性化を通じて、「大都市圏以外にも多様な選択肢がある社会」を構築することです。地方ではいま、中小企業を中心に地域経済の再興を見据えたさまざまな取り組みが推進され、事業機会の拡大と就労環境の改善が進んでいます。たとえば、みちのりホールディングスは、東北を中心に、経営が困難になったバス会社5社を傘下に収め、高齢者の利便性向上や企業向け定期券などユニークな収入拡大策を実施することにより、めざましい成長を実現しました。また、兵庫県の城崎温泉では、閑散期対策として浴衣を着て街をそぞろ歩きできる「YUKATA Village」を展開し、他の温泉地と差別化することで外国人観光客の大幅な増加を実現しています。

地方には、ポテンシャルの高い市場があり、労働力、技術、資金、社会インフラがあります。逆に不足しているのは、ビジネスを運営していく経営人材です。豊かな経験と知見を持った「50代企業人」のプロデュース力を積極的に活用することで、2030年の日本は多様な選択肢を有する、豊かで働きやすい国になると確信しています。

1980年野村総合研究所に入社。主にコンサルティング事業を担当し、2010年取締役役に就任。システムコンサルティング事業本部長、未来創発センター長、取締役 専務執行役員を経て、14年6月より現職。ワクワクできる日本の仕組みをつくるべく、時代を先駆けるリーダーとの共創ネットワーク構築に奮闘中。専門は、自動車・電気分野のグローバル製造業の事業戦略コンサルティング。近著に『日本人の「稼ぐ力」を最大化せよ』『ラストキャリア』がある。



「ワクワクする“目的”から考える」

名古屋

2015年10月14日

名古屋国際会議場

名古屋会場のパネルディスカッションでは「センス・オブ・ワンダー」「持続可能性」「動的平衡」といった、未来社会を考える際のキーとなるコンセプトが提示され、パネリスト各氏それぞれのセンス・オブ・ワンダーが語られました。



たけうち かおる
竹内 薫
サイエンス作家

日本にもプログラミング教育の浸透を

米国では低年齢からのプログラミング教育が盛んで、子どもたちは遊びながらロジックや関係性などの概念を身につけていきます。子どもの創造性を伸ばすため、日本でもプログラミング教育のさらなる浸透が望まれます。

モデレーター



ふくおか しんいち
福岡 伸一
生物学者、青山学院大学教授

分散的システムの確立を

生命体は分散的なシステム。脳がすべてを支配しているわけではなく、神経や毛細血管、細胞などが、自律的に働いて生命活動を営んでいる。社会も同様に、中央集権ではない分散的、自律的なあり方の確立が重要課題だと考えます。

パネリスト



かとう ゆりこ
加藤 百合子
株式会社エムスクエア・ラボ 代表取締役

変化こそビジネスチャンス

社会構造の変化を日々実感しています。農業分野でも従来のルールが機能しなくなり、流通改革の波が押し寄せてきました。この変化をビッグチャンスと捉え、生産と消費の新しい関係を構築していきたいと思っています。

パネリスト



ひびの かつひこ
日比野 克彦
アーティスト、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授

多様な価値観を重んじる社会に

これからの日本の社会づくりに、個性を大切にしたい。アートの視点を導入したい。老人、子ども、障がい者や外国人など、多様な人びとが混じっていた方が豊かだと思う。いろいろな人が場を共有し、互いの個性を認め合える社会を目指したいと思っています。

パネリスト

モデレーターの竹内氏の挨拶に続き、パネリストの方々が自らのワクワクした経験や仕事について紹介しました。農産物の流通革新を目指す加藤氏は「人と人をつなげた時の火花が散るような瞬間に立ち会えるのが、何よりの醍醐味」と回答。アーティストの日比野氏は、「瀬戸内海底探査船美術館プロジェクト」など、アートと地域を結びつける活動を通じたワクワクについて語りました。生物学者の福岡氏は、「ワクワクとは何かを考えると、“センス・オブ・ワンダー（未知のものに出会った時に驚く心）”という言葉思い出す。子どもの頃、昆虫の色やフォルム、美しさに魅了された。それが研究者としての私の出発点になった」と語り、センス・オブ・ワンダーに導かれてきたこれまでの人生を振り返りました。NRI理事長の谷川は「コンサルタントの使命は、企業や経営者の姿を【見える】ようにすること。仕事の中にもセンス・オブ・ワンダーがある。月曜日がいつも待ち遠しい」と発言しました。

「ワクワクする“目的”を達成するために大切にしていることは何か」という竹内氏の問いかけに対して、加藤氏は「一番大切なのは持続可能性。農業は採算の目処が立つまでに10年はかかる。生産者と購買者の間の継続的なWin-Winの関係がポイント」と語りました。日比野氏は「新潟・十日町で廃校になった小学校の校舎を朝顔で埋め尽くすプロジェクトをきっかけに、朝顔のタネの形からヒント

を得て、実際の船を建造して全国を航海するプロジェクトに発展した。人の想いが連鎖して継続的な取り組みにつながっている」と答えました。福岡氏は、日本の未来を考える際に有効なキーワードとして「動的平衡」の概念を紹介。「地球上で持続可能性に最も成功しているのは生命現象。生命の細胞は常に自分自身を破壊し、新しいものにつくり替えていく。それが進化の原動力になっ

た」と述べました。また、「生命活動と同様に、社会においても、要素(モノ)よりも、要素の関係性(コト)が重要である」との福岡氏の発言には、他のパネリストの方々から賛同の言葉が相次ぎました。



最後に竹内氏が「これからもワクワクする日本、ワクワクする未来を創るために貢献していきたい」と締めくくり、パネルディスカッションは閉幕しました。

大阪

2015年10月19日

ナレッジキャピタル
コングレコンベンションセンター

大阪会場では、ジャーナリズム、スポーツ、建築・都市設計、地域デザインなど、各方面で先駆的かつ情熱的な活動を展開されている方々をお招きし、ワクワクした経験や2030年の未来ビジョンについて縦横に語っていただきました。

モデレーターの福島氏が「これまでで一番ワクワクした経験は何か」と問いかけ、ディスカッションが始まりました。数多くの都市開発や建築プロジェクトを手掛ける迫氏は「日本と異なる社会体制や文化背景を持つ中国で、ものづくりをしたことで、日本社会が抱えている問題点や将来進むべき道が見えてきた」と述べました。長年にわたり日本のラグビー界を牽引してきた大畑氏は「小学3年生の時にラグビーと出会ってから現在まで、ラグビーは自分と周囲をつなぐツールであり、自分を表現するためのワクワクするメディアであり続けている」と語り、コミュニティデザイナーとして地方経済・

社会の活性化に取り組む山崎氏は「私の仕事は離島や山間部などの地域活性化をコーディネートすること。地方創生のモデルともいわれる島根県の^{あまちょう}海士町の取り組みでは、町民が一体となった地域振興の10年計画を企画し、実行することができた」と語りました。

「2030年に日本がワクワクする社会になるためにはどうしたらよいか」という福島氏の問いに、山崎氏は「日本の就業者の88%が会社員や公務員。終身雇用を目指すのではなく、組織に属さない生き方や働き方をもっと考えるべき」と指摘しました。大畑氏は「ラグビーでは、チーム全体のために、



「ワクワクする“目的”を実現するために心掛けていることは何か」という会場からの質問に、大畑氏は「2015年に開催されたラグビーワールドカップで、日本チームは絶対に勝てないと思われていた優勝候補、南アフリカに勝利した。目標を言葉にして、その実現に向けて自分自身を鍛えることで、不可能を可能に変えることができる」と話し、山崎氏は海士町での経験をもとに、

自分が何をするかを常に考えて動く。一人ひとりが当事者意識を持ち、ポジティブに、想いを持って行動することで社会も変わっていく」と、未来づくりにおけるマインドの重要性を強調し、迫氏は「環境問題や少子高齢化などの諸課題を、日本は世界に先駆けて経験する。これらの課題を解決し、課題解決先進国となることで、多くのビジネスチャンスが生まれる」と述べました。また谷川は、日本はホテル接客など、対人領域で利用される人工知能やロボットの技術分野で強みを活かし、世界に貢献できることを説明しました。

「地方の再興を考える場合、どんな施設をつくるかより、どのように暮らしたいのか、何を大事にしたいのかという点で住民の合意を形成することが重要」と述べました。迫氏は「中国での大規模な都市開発プロジェクトを通じて、社会は変えていけるんだという自信を得た。それがいま、建築の仕事を続ける原動力になっている」と語りました。最後に福島氏が「勇気を持って一步を踏み出すことから、大きな変化が生まれ、また次の一步が見えてくる。そんな刺激的なメッセージをパネリストの皆様からいただいた」と締めくくりました。



ふくしま あつこ
福島 敦子
ジャーナリスト

モデレーター

現在の延長線上ではない未来を

大切なことは、非常識と思われても自分の素直な感性を大事にして、現実を見つめ直してみること。そして、積極的な意志や願望を込めた将来像を思い描くこと。そこから現在の延長線上ではない未来のビジョンが見えてくるのではないのでしょうか。



さこ けいいちろう
迫 慶一郎
建築家 / SAKO建築設計工社代表

パネリスト

自分のやり方を固定化しない

中国や日本で建築プロジェクトに携わる中で心掛けてきたのは、変幻自在であること。目指す姿を実現させるために、相手が実現させたいことを優先させつつ、相手の想いと自分がしたいことのベクトルが交差する点を探すようにしてきました。



おおはた だいすけ
大畑 大介
元ラグビー日本代表、
ラグビーワールドカップ2019 アンバサダー

パネリスト

チャレンジで夢を現実に

一流ラグビー選手となることを目指し、高校に入学。当時から、他の人との比較ではなく、どう自分になりたいかを自らに問いかけながら鍛錬を続けたことが成功体験となりました。信じて挑戦することで、夢を現実に変えることができました。



やまざき りょう
山崎 亮
studio-L 代表、
東北芸術工科大学教授(コミュニティデザイン学科長)

パネリスト

「ワクワク」の循環を生み出す

地域活性化のためには、まずワクワクする未来を描くこと。そして、ワクワクしつつ仕事をし、「ありがとう」と言われて、またワクワクする。この小さな循環を生み出す仕事を地域の中につくるプロジェクトが重要になります。

東京

2015年10月26日

東京国際フォーラム

東京会場では、多彩なパネリストの方々により、広い意味でのデザインや編集の立場から、また、宇宙から見た地球という視点から、未来社会の姿を展望するディスカッションがおこなわれ、会場が大いに盛り上がりました。

各氏の自己紹介のあと、モデレーターの竹内氏が、これまでで一番ワクワクした経験や仕事について問いかけました。フェラーリなどのデザインも手掛けた工業デザイナーの奥山氏は「3Dプリンタやデジタル技術を駆使して、小ロットでものづくりができるようになった。こうした時代の変化にワクワク感を覚えている」と語りました。編集者として、漫画『宇宙兄弟』などのヒット作を世に送り出し、現在はクリエイターのエージェント会社、コルクを経営する佐渡島氏は「良質なワインにコルクが必要のように、クリエイターにとって必要不可欠な会社にしたい、という思いでコルクと名づけた。作品を世界に発信する仕事にワクワクしながら取り組んでいる」と述べました。宇宙飛行士として国際宇宙ステーション(ISS)で組立補給ミッションに従事した山崎氏は「ロボットアームを操作して、スペースシャトルからISSに補給物資を搬入した。操作が終わった時、ISSはちょうど日本列島の真上400キロを飛んでいて、その偶然に感動した」と、一般人の経験できない希有な体験を披露してくれました。

「デザインする時に一番大切にしていることは何か」という会場からの質問に、奥山氏は「お客様の10年後、15年後を想像すること。その上で、自分に何ができるかを突き詰めて考えると、“絶対にこれしかない”というものに行きつく」と述べました。佐渡島氏は「本当に優れた作品やビジネスは、多くの人が参加できる“席”をつくる。出版業界にその“新しい席”がつかれるのではないかと考え、いま、頑張っている」と語りました。



たけうち かおる
竹内 薫
サイエンス作家

トライリンガルの時代

将来、日本の子どもたちは3つの言語を習得することが必要となるでしょう。日本語、英語、そして計算言語です。計算言語とはコンピュータと自在にやりとりする数学的な言葉のこと。2030年は「トライリンガルの時代」です。

モデレーター



おくやま きよゆき
奥山 清行
工業デザイナー / KEN OKUYAMA DESIGN 代表

未来は偶然によるものではない

相手の気持ちに答えようとする中で、自分に与えられた以上の仕事ができる。未来は、自分たちが「これだ」と思って積み重ねた努力によってできるもの。自分のやりたいことがどこにあるのかを考えることが重要です。

パネリスト



さどし ま ようへい
佐渡島 庸平
株式会社コルク 代表取締役社長

“遊び”がビジネスの重要な要素に

昔は洗濯機など、「時間節約」型の製品が多かったが、これからは、「時間消費」型のモノを提供する会社がブランドをつくっていける。小説なども同様で、時間を消費することで気持ち豊かになるような“遊び”をつくるビジネスをつくっていきたい。

パネリスト



やまざき なおこ
山崎 直子
宇宙飛行士

答えのない時代に

これからは、与えられた課題に対処するというだけでなく、正解がわからない中でも、情報を集めて自分たちで考えながら立ち向かっていくことが重要な時代になっていくと思います。

パネリスト



た。佐渡島氏は「これからはすべての人がクリエイターとして社会に自分を発信していく。それを媒介するのは編集者。編集の仕事がすべての分野で必要となる」と2030年の社会を展望し、谷川はコンサルタントとしての経験を踏まえて、「日本はこれまでの100年で、中央集権的にインフラをつくってきた。

竹内氏の「2030年に向けてわれわれは何をすべきか」という問いかけに、山崎氏は「未来社会のキーワードは危機管理とチームワーク」と応え、奥山氏は「時代を追ってはい時代をつくれな。自分が楽しいと思うことを追求すべき」と述べまし

た。これからはその使い方を考える時代」と語りました。最後に竹内氏が「未来は用意されているものではなく、私たち自身が参画し、考え、努力してつくっていくもの」と述べ、パネルディスカッションを締めくくりました。



活発なパネルディスカッションの様子



熱心に展示物をご覧になるご来場者の方々



会場ロビーではNRIの書籍や刊行物を展示



東京会場の様子。約3,000名の方々がご来場